

皇帝の孤独と悲哀——元雜劇「漢宮秋」試論

廣瀬 玲子

はじめに

馬致遠の作とされる元雜劇「漢宮秋」は、漢の元帝と王昭君（王嬙、字は昭君）をめぐる伝説にもとづく作品である。『元曲選』百種の巻頭に置かれていることから、このジャンルの代表作の一つとされてきた。皇帝とその妃が主要な人物であること、皇帝が主役（正末）として歌唱により心情を吐露すること、妃の悲劇的な死への哀悼をもつて劇を終えることは、白樸の「梧桐雨」と共通であり、二作品は並び称せられることも多い。

まず、細部は省略して、ごく簡単に「漢宮秋」のあらすじを述べると次のようになる。

漢の元帝は中大夫の毛延寿の提案により後宮に宮女を集める。その一人であった王昭君は毛延寿の悪意のせいで皇帝にまみえることなく十年が過ぎる。ある夜、昭君の奏でる琵琶の音色に誘われた元帝に見いだされて寵愛を受けるようになる。しかし、昭君は番国の单于に嫁ぐために旅立つことになり、国境で入水して亡くなる。元

帝が昭君の不在を嘆いているところへ、その死の知らせが届く。

正史によれば、王昭君は匈奴で単于の妻となり子どもも生まれているので、本劇の内容は歴史書の記述から逸脱している。

正史のうち、『漢書』の「元帝紀」や「匈奴伝下」では、元帝が匈奴の単于に与えた宮女がなぜ王昭君であったのかについての記述はない。一方、『後漢書』「南匈奴列伝」では、与えた宮女は五人である。そのなかの一人として、後宮に入るも不遇であった昭君が自ら行くことを望み（昭君入宮數歲不得見御、積悲怨、乃請掖庭令求行呼韓耶）、元帝は昭君の美しさを知って悔やんだが、信用を失うことをおそれてそのまま匈奴に与えた（帝見大驚、意欲留之、而難於失信、遂与匈奴）と記されている。

つまり、王昭君はその美しさにもかかわらず皇帝に愛されることがなかったというわけであるが、それに対して、なぜなのかという説明はない。その理由が語られるのが『西京雜記』卷二であり、絵師の毛延寿も言及される。

元帝の後宮には宮女が多く、いつも会えるわけではないので、絵師に肖像画を描かせて、それを参考にして召し出していた。宮女たちはみな絵師に賄賂を贈り、多い者は十万、少なくとも五万を下らなかつた。ただ王嬙だけは与えようとしなかつたために皇帝にお目見えすることはなかつた。匈奴が入朝して美人を閼氏（単于の正妻）にしたいと求めたので、帝は絵姿により昭君を嫁がせることにした。旅立つ前に会ってみると、顔立ちの後宮一の美人であり、受け答えも申し分なく、立ち居ふるまいもしとやかであつた。帝は悔やんだがすでに名簿を確定していたので、外国の信用を重んじて別人に変更することはなかつた。

その後この案件を取り調べ、絵師たちはすべて衆目のもとで処刑され、家財は没収されたが、その資産はいず

れも巨万であつた。絵師の中では杜陵の毛延寿が、人の姿を描けば美醜も老若も必ず生き写しであつた。⁽¹⁾

このあと、毛延寿以外の絵師の名前と特色が挙げられているが、「(彼らは)人の姿の美醜については延寿には及ばない」と、毛延寿が人物画に優れていたことが特記されている。王昭君の絵姿を描いたのが毛延寿であつたと明言されているわけではないものの、この文脈から、そのような推測が促される。⁽²⁾ 技量が優れていたと書くことで、いかに真実をゆがめていたかを強調していると考えられることもできる。

このようにして、才色ともに傑出していた王昭君が寵愛を受けなかつたことに対し、絵師が真の姿を描かなかつたから、さらに遡って、それは王昭君が賄賂を贈らなかつたからという理由が与えられたのである。

正史も含めて、王昭君についての記述がどこまで事実を反映しているかを判断することは難しい。それまでの語りに含まれる謎や空白が、次々と埋められつつ伝承されるのは、こうした語りの常である。異国の王に嫁いだ宮女の存

(1) 原文は次のとおり。

元帝後宮既多、不得常見、乃使画工图形、案图召幸之。諸宮人皆賂画工、多者十万、少者亦不減五万。独王嬪不肯、遂不得見。匈奴入朝、求美人为閼氏、於是上案图、以昭君行。及去、召见、貌为後宫第一、善应对、举止閑雅。帝悔之、而名籍已定。帝重信於外国、故不復更人。乃窮案其事、画工皆棄市、籍其家、資皆巨万。画工有杜陵毛延寿、为人形、醜好老少、必得其真。安陵陳敞、新豐劉白、龔寬、並工为牛馬飛鳥衆勢、人形好醜、不逮延寿。下杜陽望、亦善画、尤善布色。樊育亦善布色。同日棄市。京師画工、於是差稀。

(2) 清の焦循『劇說』卷五は、王昭君の故事を劇化した元明の雜劇のうち馬致遠の「漢宮秋」を高く評価し、誅殺された複数の絵師のうちの毛延寿に罪を帰していることも指摘している。「東籬(馬致遠)則婦咎毛延寿一人」(中国戲曲研究院編『中国古典戲曲論著集成』八、一九六〇年、一九〇頁)。

在は、人々の想像力をかきたて、数多の詩が作られ、いくつもの伝説が生まれ、それらは少しずつ形を変えながら語られた⁽³⁾。元雜劇「漢宮秋」もそのうちの一つであると言えよう。

吉川幸次郎は、本劇の「永遠普遍的価値」について次のように述べる。

人間の必然としてある恋愛感情の真実さを、皇帝、天子という、古い体制においては特殊な隔絶した地位にある人物にあてはめ、しかもその真実さは毫も変化を見せず、一般人とことならぬことを、えがいて見せ、それによってこの感情の必然さを検証したところに、この劇の感動はあり、価値はある、と考える。⁽⁴⁾

本劇の歌唱者は一貫して元帝であり、皇帝がときには繊細で優雅な、ときには卑俗な曲詞によって心中の感情を表現することは、紛れもなく本劇の特色の一つである。一方で、次のような意見もある。

もちろん、元雜劇はすべて曲が主要であるのだが、馬致遠の雜劇作品は、曲に異常なまでに突出した地位を与えている。それと比べると、せりふは貧弱で味気ないことが多く、ぱつとしない。⁽⁵⁾

「漢宮秋」は元雜劇の名作の一つだが、その長所は主として男性主人公の優雅で非凡な心理表現にあり、馬致遠はやはり、曲によって感情表現をするという方法で劇を展開させることにもっとも長けている。「漢宮秋」のうち人口に膾炙し、人々が賞讃する曲は、すべて昭君が去っていった後に配置されている。(中略) 思ひは沈痛であるが、すでに演劇的葛藤はなく、物語が進展を見せることもない。⁽⁶⁾

要するに「漢宮秋」は曲詞に重点が置いて作られ、評価されてきたのであって、歌唱するただ一人の人物である元帝に比べて、せりふによるしかない王昭君の感情は、十分に表現されてはいないということである。劉小梅はこれを、散曲にすぐれていた馬致遠による「戯曲の散曲化」と称し、演劇としてはもの足りない点として指摘する。

とはいえ、劉も認めているとおり、元雜劇は、同時代の散曲とともに元曲と呼ばれ、むしろ韻文の歌詞を乗せた「曲」が核となつてゐる演劇である。王昭君ではなく元帝が歌唱すること、王昭君が入水して死を遂げるという展開にしたことによつて、「漢宮秋」はどのような演劇的表現を達成しているのか。本稿では本劇を読解することによつて、その特徴を探つてみたい。

一 毛延寿の奸計とその露呈

以下、楔子と各折の梗概を述べつつ、検討を加えることとする（途中の／はその前後で場面が異なることを示す）⁽⁷⁾。

楔子・呼韓耶单于が慣例にもとづき、使者を送つて漢朝に公主の献上を求める。／漢の中大夫である毛延寿は、後宮の女性が少ないという元帝に宮女を補充するよう提言する。元帝はそれに賛同し、宮女たち一人ひとりの肖像画

(3) 伊藤実雪「漢宮秋」劇の悲劇性」〔比較社会文化研究〕7、二〇〇〇年）参照。

(4) 「漢宮秋雜劇」の文学性」〔吉川幸次郎全集〕第十五卷、筑摩書房、一九六九年）、一九三頁。

(5) 劉小梅『宋元戲劇的雅俗源流』（文化芸術出版社、二〇一〇年）、一二二頁「訳文は廣瀬による」。

(6) 同前、一二四頁。

(7) 「漢宮秋」の現存するテキストには、脈望館古名家雜劇本（以下、古名家本と略す）・顧曲齋本・元曲選本・醉江集本がある。以下の引用には、古名家本（冒頭のタイトルは「孤雁漢宮秋」）を用いる。

を描かせ、それを見て臨幸しようと言う。

本劇が繰り広げられるのは、番国（匈奴を指すことは明らかだが劇中に匈奴という語は現れない）と漢の都である長安という遠く離れた二つの場所である。舞台上ではこの二つの場所は一瞬にして入れ替わるが、登場人物のうち呼韓耶单于と元帝とは出会うこともない。楔子では、单于が遣わした使者はまだ長安に到着せず、元帝はその要求も知らずに安穩と日々を過ごしている。

毛延寿は登場すると次のように言う。

某不是別人、毛延寿的便是。見在漢朝駕下、為中大夫之職。因我百般巧詐、一味諂諛、哄的皇帝老頭兒十分歡喜、言聽計從。朝裏朝外、那一個不敬我、那一個不怕我、我又学的一個法兒、只是教皇帝少見儒臣、多昵女色、我這寵才得牢固。

わしこそは毛延寿だ。いま漢の天子のもとで中大夫の職についておる。わしがあの手この手でうまいこと言いくるめ、ひたすらおべっかを使うので、皇帝は大よろこび。何でもわしのいいなりだ。朝廷の中でも外でもわしを大事にしないやつ、恐れないやつなど一人もおらん。そのうえある方法を学んだのだ。皇帝を儒臣と会わせず、女色にふけらせておけば、わしはずっと皇帝のお気に入りというわけだ。

絵師であつたはずの毛延寿は本劇では漢朝の中大夫という職に就いている。皇帝を思うままにあやつり権力をふるうその所行は悪辣きわまりないのだが、そのような人物であるからには、皇帝にじかに接して進言をすることができなければならない。絵師というだけの設定では足りないのである。

一方で元帝は、毛延寿が佞臣であることにも気づかず、国の内外が平和に治まっていると思つてゐる。楔子の唯一の曲は次のようなものである。

【賞花時】四海安然絶士馬、五穀豊登没戰伐。寡人待刷室女選宮娃、你避不的驅馳困乏、看那一個合属俺帝王家。
(元帝うた) 国は安泰で兵馬は絶え、五穀は豊穰で戦乱もない。乙女を選びすぐつて宮女を選ぼう。おまえは勞を惜しむことなく、誰が帝王のわたしにふさわしいか見定めよ。

第一折…毛延寿は賄賂を要求しつつ百人の宮女を集めるが、王嬙(字は昭君)の家は貧しく賄賂を与えなかつたために実際とはちがう肖像画が描かれ、十年のあいだ皇帝にまみえることもなく過ごした。ある日、元帝は後宮で琵琶の音色に惹かれて王昭君を訪れ、一目でその容姿と人柄に心を奪われる。事情を知つた元帝は毛延寿を斬首するよう命じ、昭君を明妃とする。

この折は漢の宮廷のみが舞台である。毛延寿が百人の宮女の選定を終えたところから始まり、最後の一人が王昭君であつた。絶世の美人ではあるものの、農家の娘で、裕福ではない。

我問他要百兩黄金、選為第一。他一則説家道貧窮、一則倚着他容貌出衆。⁽⁸⁾ 欲待退了、不要到好了他。眉頭一縱計上心来、只把美人図点上些破綻。到京師必定退入冷宮、教他受一生清冷。

(8) 元曲選本ではこのあとに「全然不肯」があり、賄賂を与えようとしなことが明確に表現されている。

(毛延寿せりふ) わしは黄金を百両出せば一番にしてやろうともちかけた。やつは一つには暮らしが貧しいと言
い、一つには容貌が抜きん出ていることを頼みにしおった。選ぶのをやめようかと思つたが、それはかえつてや
つに好都合。頭をひねって考え出した策は、美人図にいささか傷をつけてやることだ。都に着いたらきつと冷宮
に追いやられるだろう。一生さびしい思いをさせてやるぞ。

『西京雜記』には、王昭君の家がなぜ賄賂を与えなかつたのかは記されていなかった。ここではその理由が明示さ
れている。ただし、家が貧しかったことはこのあとの王昭君のせりふにも見られるが、自らの美しさを当てにしてと
いうのは毛延寿の悪意ある主観であるかもしれない。

この場面のあと、劇中では長い時間が経つ(王昭君の登場詩に「十年未得見君王」の句がある)。王昭君は毛延寿
の思惑どおりに孤独な日々を送ることになった。しかも昭君自身、その不幸は毛延寿が肖像画に細工したことが原因
だと知っているのである。たまたま琴の音色に誘われて昭君のもとを訪れた元帝はその美しさに魅了される。

看卿這等休態、如何不得近幸。(旦) 妾父王長者、止生妾身、当初選時、使臣毛延寿索要金銀、妾家貧寒無湊、
故將妾眼下点成大破、因此收入冷宮。(駕) 小黃門、你取那影図來看。

(元帝せりふ) おまえはこのような容姿なのに、どうして目をかけることがなかったのだろう。(昭君せりふ)
わたくしの父は王長者、その一人娘でございます。宮女に選ばれたとき、使いの毛延寿が金銀を要求しました
が、わたしの家は貧しくて用立てることができませんでした。そのためわたしの〔絵図の〕目元がひどく醜く
描かれ、冷宮に入れられることになったのです。(元帝せりふ) 黄門、絵図を持ってきて見せてくれ。

このようにして毛延寿の悪行が明らかになり、元帝は斬首を命じる。次節で見られるように、ここから本劇に独特の展

開が始まる。そのためには、王昭君が自らの冷遇の原因を知っており、それを元帝に語ることが不可欠なのである。

二 逃亡する毛延寿とさらなる奸計

第二折…毛延寿は番国に逃げて、单于に王昭君の美人図を見せ、「昭君は单于との結婚を望んだのに元帝が許さず、かえって女色を諫めた自分を殺そうとしたので逃げてきた」と虚言を弄する。／元帝が昭君のもとを訪れてみると、番国の使者が昭君を求めてやってくる。臣下たちは他に策もなく、国家のためには昭君を差し出すしかないと言うばかり。昭君はそれに従うしかなく、元帝とともに悲嘆に暮れる。

毛延寿は逃亡して番国にやってくると、单于に目通りして次のようにやりとりをする。

某是漢朝中大夫毛延寿。有我漢朝西宮閣下美人王昭君、生得絶色。前者单于主人遣使求公主、那昭君情願請行、漢帝捨不的、不肯放來。某再三苦諫説、豈可重女色、失兩國之好。漢主到要殺我。某因此帶得此美人圖、獻与单于主人。可遣使按圖索要、必然得了也。這就是凶樣。（進上看科）（末）世間那有如此女人。若得他做關氏、我願足也。如今就差一番官、率領部從、寫書与漢天子、求索王昭君与俺和親。若不肯与、不日南侵、江山莫保。（毛延寿せり、ふ）わたくしは漢朝中大夫の毛延寿でございます。わが漢朝の西宮には王昭君という絶世の美人がおります。以前に单于どのが使者を遣わして公主を求められたとき、その昭君が名乗りを上げたのですが、漢の主君が惜しんでどうしても手放さなかつたのです。わたくしが「どうして女色を重んじて兩國の友好を妨げる

ことができましようか」と何度もおいさめしたところ、主君はわたしを殺そうとしました。そこでこの美人図を単于どのに献上しに参ったのです。使者を遣わしてこの絵図の女性を求めるならきつと手に入るでしょう。これがその絵でございます。(近づいて見せるしぐさ)

(単于せりふ) 世の中にこのような女性がいろいろとある。この者を正妻にできれば満足だ。今から従者を引き連れてた役人を派遣し、漢の天子への書状をしたためて、王昭君を要求して和親をもちかけよう。もし承知しなければすぐに南進して侵入し、漢は領土を失うことになろう。

毛延寿は漢の元帝に処刑されるのを避けて番国へと逃亡し、単于をそそのかして元帝と王昭君への復讐を果たそうとする。ここでもその道具として美人図が用いられる。この美人図はもちろん当初の絵図とはちがって、昭君のありのままの姿のほずである。昭君の人生は、真と偽の二種類のイメージに翻弄される。偽のイメージによって漢朝で冷遇され、真のイメージによって番王の妻となるのである。

そのような事態になるとは思いも寄らず、元帝は一曲目の【南呂一枝花】でまたも太平の世をことほぎ「忠臣皆有、高枕已は無憂」、昭君への恋心をうたう「守着那皓齒星眸、争忍虚白昼」。そこへ番国の使者が到着し、単于が毛延寿の誘導により王昭君を差し出すよう要求しており、応じなければ侵略する計画であると告げる。

曲詞は一転して臣下たちへの苦言となる。

【牧羊関】興廢從來有、干戈不肯休。可不食君禄、命懸君手。太平時売你宰相功勞、有事処把俺佳人遞流。你們干請了皇家俸、却甚分破帝王憂。(後略)

(元帝うた) 興亡はいつの世にも起こり、戦乱は終わろうとしない。主君の禄を食むのなら、おまえたちの運命

は主君が握っているはずなのに。平和などときには宰相の自分の手柄とひけらかし、有事の際にはわが佳人を引き渡すのか。おまえたちは国家の俸給をもらいながら、帝王の悩みを晴らしてはくれないのだな。

元帝はほかに何かよい方策はないのかと尋ねるが、臣下たちは紂王と妲己の例までもちだして、昭君を諦めるように提言するばかりである。皇帝が怒りを露わにする一方で、臣下も口答えをしたりして、身分の差はあまり感じられない。昭君はけなげに、番国との友好を保つために要求に従おうと言う。

(旦) 妾既蒙我王厚恩、当効一死、以報陛下。妾情願和番、得息刀兵、亦留名青史。但妾与陛下闈房之情、怎生抛捨也。(駕) 我可知捨不的卿哩。(外) 陛下割恩断愛以社稷為念。早早發送娘娘去罷。

(王昭君せりふ) わたくしはわが帝の厚いご恩を受けておりますから、命を懸けて陛下に報いなければなりません。番国との和平に役立ち、戦乱を防いで、歴史に名を残したいと思えます。ただ陛下とあいだの愛情をどうして捨て去ることができましょう。(元帝せりふ) わたしもおまえを手放すことなどできるはずがないよ。(尚書令せりふ) 陛下、どうか恩愛を断ち切って社稷のことをお考えになり、すぐにお妃を旅立たせてください。

直ちに昭君を出発させようとする臣下たちに対し、元帝は皇帝としての威厳も振り捨てて、翌日に瀟陵橋で送別することを認めさせる。

三 別れ、そして死

第三折…瀟陵橋での送別の場面である。使者はしきりに出発を促すが、元帝は長々と別れを惜しむ。／呼韓耶单于の

もとに到着した昭君は、国境の黒龍江に身を投げて亡くなる。

王昭君はすでに番国の使者三名にとりまかれて登場し、ついで元帝が送別の場にやってくる。

【双調新水令】錦貂裘生改尽漢宮妝、我則索看昭君画図模様。旧思金勒短、新恨玉鞭長。本是対金殿鴛央、分飛翼、怎承望。

愆文武百官計議、怎生退了番兵、免明妃和番者。

(元帝うた) 漢の宮廷の装いを、むりやり豪華なテンの皮衣に着がえるなら、わたしは昭君の姿を絵図で見るとかない。今までの恋は金のクツワのように短く、これからの未練は玉の鞭のように長くなるだろう。はなやかな御殿のオシドリであったのに、別れて飛んでいくとは思ひもかけなかったことよ。

(せりふ) あまたの文武の役人たちよ、どうすれば番兵を撤退させ、明妃を和親の役目からのがれさせることができるか協議せよ。

しかし、文官・武官は元帝の気持ちを見せず、尚書令の五鹿充宗は「陛下、もう思い切りなさいませ」「陛下不必掛念」、「陛下、もう帰りましょう」「陛下、咱回朝去罷」などと無情な言葉を繰り返すばかりである。番国の使者も「お妃さま、早く出発しましょう。日が暮れます」「請娘娘早行、天色晚也」、「お妃さま、行きましょう、ずっと待っているんです」「請娘娘行罷、臣等來多時了也」などと出発を促す。そのなかで、元帝はひとり、現在の悲しみだけでなく、異国に向かう昭君の思いや、昭君のいない宮中に帰ったあとの自らの寂しさをも先取りして歌唱する。もつとも有名なのが、【梅花酒】後半の次のくだりである。

他傷心辭漢主、望携手上河梁。前面早叫排行、愁鸞輿到咸陽。到咸陽、過蕭牆。過蕭牆、葉飄黃。葉飄黃、遶回廊。遶回廊、竹生涼。竹生涼、近椒房。近椒房、泣寒螿。泣寒螿、綠紗窓。綠紗窓、不思量。

あの人は悲しみつつ漢の主君に別れを告げ、手をつないで橋を渡ることを望めども、前から早くも聞こえるのは、旅立つ行列を整える声。愁いつつわたしの車は咸陽へ帰る。咸陽へ帰れば土塀をよぎる。土塀をよぎれば黄色い葉が舞い落ちる。黄色い葉が舞い落ち、回廊をめぐる。回廊をめぐれば竹が木陰を作る。竹が木陰を作るなか椒房に近づく。椒房に近づけば秋の虫が鳴く。秋の虫が鳴いて、緑紗のかかる窓。緑紗のかかる窓を見れば、あの人を思わずにいられようか。

実景だけではなく想像をまじえた曲詞は、三文字の繰り返しによって感情をかきたて、孤独な存在としての元帝の姿を浮かびあがらせる。王昭君が去っていったのちに、第三折の最後の曲が唱われる。

(外) 陛下回鑾罷、娘娘去遠了也。(駕)

【鴛鴦煞】 我煞大臣行説一個推辞説、又則怕筆尖兒那火偏修講。不見他花朵兒精神、怎趁那草地裏風光。唱道佇立多時、徘徊半晌。猛聽的塞雁南翔、呀呀的声嘹唳。却原来是滿目牛羊、是兀那戴離恨的氈車半坡裏響。(下)

(尚書令せりふ) 陛下、お車を返しましょう。お妃さまは遠くへ行ってしまった。

(元帝うた) 大臣たちの前では何とかごまかせても、ただ恐れるのは史官たちの筆。もう見ることはないあの花のように優しい心ばえ、どうして草原の風光になじむだろう。いつまでも立ちすくんでは行ったり来たり。にわか聞こえるのは、北の雁が南へ飛んで、ヤーヤーと鳴く高い声。と思つたら実は、群れなす牛羊と、別れの未練を載せた毛氈の車が坂道できしむ音。(退場)

元帝は王昭君を載せた車から見える景色「滿目牛羊」を幻視しているのではないだろうか。北へと向かう王昭君の車とは逆に、北から渡ってくる雁の声が聞こえたと思う。しかし、それは去っていく車がたてる音なのである。この雁のモチーフは、さらに第四折へと引き継がれる。

さて、元帝が退場したあと場面は早くも国境に移り、番王の呼韓耶单于が部下を引きつれ、王昭君を囲んで登場する。国境である黒龍江まで迎えに来たのである。

(旦) 大王、借一盃酒、望南澆奠、辞了漢家、長行去罷。(做奠酒科) 漢朝皇帝、妾身今生已矣、尚待来生也。
(做跳江科) (番救科云) 今昭君不肯順番、投江而死。罷罷、就葬在此江辺、号為青塚者。我想来、人又死了、及与汉朝背盟、都是毛延寿這廝搬弄的。左右、将毛延寿拿下、解送汉朝处治。我依旧与汉朝结和、永為甥舅、却不⁹是好。善惡終莫隱、只在速遲間。(下)

(王昭君せりふ) 大王さま、一杯のお酒をお借りして南に向けて注いでお祭りし、漢王朝とお別れしてから遠くへ参りましょう。(酒を注いで祭るしぐさ) 漢の皇帝陛下、わたくしのこの世の生は終わりました。また来世でお会いしましょう。(川に身を投げるしぐさ、番王救うしぐさ、せりふ) いま昭君はわが国に徙おうとせず川に身を投げて亡くなった。しかたない、この川辺に埋葬して青塚と呼ぶことにしよう。思えば、人が亡くなり漢朝との盟約に背くことになったのも、みな毛延寿のやつが仕出かしたこと。者ども、毛延寿を捉え、漢朝に護送して処罰してもらおう。漢朝とはもとのとおり¹⁰に和平を結び、末永く甥舅の関係を保つのがよからう。善も悪も結局は明らかになり、ただ速いか遅いかのちがいがあるのみ。

何ともあつけない展開である。单于はそそくさと埋葬に言及し(しかも「青塚」は昭君の墓の後世の呼称である)、

思いも寄らなかつたはずの王昭君の死に衝撃を受けて茫然とする様子はない。また、この突然の出来事によって、すべてが毛延寿の陰謀であつたとすぐに気づくというのも奇妙である。既述したように、せりふの稚拙さが指摘されるのも無理はないだろう。

四 皇帝の孤独

第四折…別れてから百日、元帝の悲嘆はおさまらず、美人図を掛けて昭君を思い出す。うたたねの夢で昭君に会うが、すぐに番兵に連れ去られて、目が覚める。雁の声に心を乱されると、昭君自死の知らせが入る。漢に送還された毛延寿を処刑して王昭君への鎮魂のしるしとする。

静かな夜、思いが募る元帝は美人図をながめて過ごす。香が燃えつききて黄門に新たに持つてこさせるのは、そのものの思いが長時間にわたることを示している。

【醉春風】 恰尽御炉香、再添黄串餅。想娘娘似竹林寺不見半分形、則留下這個影、這個影。未死之時、在生之日、

(9) 元曲選本では、このあと、これまでの流れをふりかえるような詩が入って終わる。

〔詩云〕 則為他丹青画誤了昭君、背漢主暗地私奔。将美人図又来哄我、要素取出塞和親。豈知道投江而死、空落的一見消魂。似這等奸邪逆賊、留著他終是禍根。不如送他去漢朝哈刺、依還的甥舅礼、兩國長存〔下〕。

一般恭敬。

一時困倦、我且睡些兒。

高唐也夢苦難成、那裏也愛卿、愛卿、却怎生無些靈聖。怎做的吾当染之輕。(睡科)

(旦上) 妾身王嬙、和番到北地、私自逃回。兀的不是我主人。陛下、妾身來了也。(番兵上) 恰才我打了個盹、王昭君就偷走回。我急急趕來、進的漢宮、兀的不是昭君(做拿下、駕醒科云) 恰才見明妃回來、在這些兒如何就不見了。

(元帝うた) 香は燃えつき、さらに足す。妃を思つても蜃気楼のように姿は現れず、この絵を、この絵を残すのみ。命の果てるまで、生きているかぎり、ずっと慕いつづけよう。

(せりふ) 少し疲れたので眠ろう。

(うた) 高唐の夢を見ることはかなわない。いとしい人、いとしい人はどこにいる。どうして何の奇跡もおとすれないのか。どうしてこの苦しみを軽んじるのか。(眠るしぐさ)

(王昭君登場してせりふ) わたくし王嬙は番国との和平のため北地にやってきましたが、こっそり逃げ帰ってきました。このかたはわたくしのご主人ではありませんか。陛下、もどつてまいりましたよ。(番兵登場してせりふ) ちよつとうたつた寝をしたと思つたら王昭君が逃げてしまった。急いで追いかけて漢の宮殿に入り、あれは昭君ではないか。(捉えて退場する。元帝目覚めてせりふ) 明妃が帰ってきたと思つたのに、どうしてここにいないのだ。

男女が別れのあとに夢の中で再会するのは戯曲の常套であるが、本劇が独特なのは、王昭君がすでに亡くなってお

り、元帝はそれをまだ知らないという点である。この場面ですれを知っているのは観客（読者）だけである。したがって、このあと聞こえてくる雁の鳴き声に元帝が投影するのは旅立っていった昭君であるとしても、観客（読者）が雁に投影するのはすでに死者となった昭君の魂なのではないだろうか。

二度と昭君に会えない以上、元帝にとつてその生死は問題ではないのかもしれない。魂が抜けたような状態の元帝の耳に聞こえてくるのが、雁の鳴き声である。このあとの曲はすべて雁に語りかけるかのように唱われる。

宮中の楽師たちによる音楽の音色が聞こえてきたと思つた元帝は次のようにうたう。

【蔓青菜】白日裏無承応、教寡人不曾做一個到天明团円夢境。（雁叫了）却原来雁叫長門函三声、怎知道更有個人孤另。（雁叫了）

【白鶴子】多管是春秋高、筋力短、莫不是食水少、骨毛輕。待去後、愁江南網羅寬。待向前、怕塞北雕弓硬。

【么】傷感似替昭君思漢主、哀怨似作薤露哭田橫。悽愴似和半夜楚歌声、悲切似唱三疊陽関令。（雁叫了）

（元帝うた） 昼間には奏でないのに、わたしに明け方までまどかな夢を見させてくれないのか。（雁が鳴く）と思えば長門宮で鳴く雁の声であったのか。ここに寂しい人がひとりいるのをどうして知つていよう。（雁が鳴く）

（うた） おそらくは年老いて力なく、食べるものも少なく痩せているのだろう。もどろうとしても江南では網が広がるのが心配で、進もうとすれば塞北の強い弓がおそろしい。

（うた） 痛ましいこと昭君に代つて漢の主君を思うよう。哀しいこと「薤露」の挽歌で田横を悼むよう。凄絶なること真夜中に聞く楚歌の声のよう、切実なること三たび繰り返す陽関の曲のよう。（雁が鳴く）

第四折の梗概に示したように、本折は二人の別れから百日（概数であろうが）経った場面である。第三折の自然描

写は明らかに秋であつたので、季節はめぐつて春になつてゐるはずである。しかし、いとしい人を失つた元帝の時間は、秋のまま止まつてゐるのではないだろうか。ここでしきりに鳴いてゐるのは、秋に北から飛来し、春になつたので北へと帰る雁なのかもしれない。だが、元帝には北から帰つてきてほしい昭君に重ねあわされてゐるのだから。本劇の正名に「破幽夢孤雁漢宮秋」とあるように、第四折の漢宮は秋でなければならぬのである。

元帝は雁の心に心を乱されたまま退場し、本劇は次のように終わりを迎える。

【尾声】 一声兒遶漢宮、一声兒寄渭城、暗添人白髮成衰病、只恁的吾家可也勸不省。(下)

(外扮丞相) 今日早朝散後、有番国差使命綁送毛延寿来、説只因毛延寿叛国敗盟、致此禍變。今昭君已死、情願两国講和。奉聖人命、已將毛延寿斬首祭了明妃。着光祿寺大排筵席、犒賞来使回去。正是、国正天心順、官清民自安。妻賢夫禍少、子孝父心寬。

題目 毛延寿叛国開邊釁 漢元帝一身不自由

正名 沈黑江明妃青塚恨 破幽夢孤雁漢宮秋

(元帝うた) 一声鳴けば漢の宮殿をめぐり、一声鳴けば渭城にとどき、ひそかに人の白髪を増やし病み衰えさせ。それでもわたしにはどうすることもできない。(退場)

(丞相登場してせりふ) 今朝、朝廷での会議が終わったあと、番国の使者が毛延寿を護送してきました。毛延寿は国家に背いて盟約を破り、この禍を招いたとのこと。昭君はすでに亡くなられたことから、両国の講和の願いが出ております。皇帝の命を受けてすでに毛延寿を斬首して明妃を祭りました。光祿寺には盛大な宴席を用意させ、使者をねぎらうことにします。まことにこれ、国が正しければ天の心もおだやか、役人が清廉であれば民は安心、妻が賢ければ夫に禍は少なく、子が孝であれば父の心は広い、というもの。

元曲選本では、元帝は歌唱のあとですぐに退場するのではなく、丞相の報告を聞き、「そういうことなら、毛延寿を斬首して明妃にささげて祭ろう。光禄寺には盛大な宴席を用意させ使者をねぎらうから帰そう」「既如此、便将毛延寿斬首、祭献明妃。着光禄寺大排筵席、犒赏来使回去」と命令を下す。最後は元帝の退場詩、「葉落深宮雁叫時、夢回孤枕夜相思。雖然青塚人何在、還為蛾眉斬画師」となる。⁽¹⁰⁾

群れを離れた孤独な渡り鳥である「孤雁」は、異国へと旅立った王昭君とともに、すでに亡くなった王昭君の魂をイメージさせる。眠れぬ夜に、姿は見えず、声だけが聞こえてくる。それが元帝を悩ませ、苦しませ、自らもまた孤独であることを痛切に感じさせるのである。

五 強力な毛延寿——ドラマの展開

見てきたように、本劇は曲詞による心理表現に重点が置かれた作品である。せりふは型どおりのものが多く、曲詞との対応も優れているとは言えないだろう。

元帝による曲詞の内容は、主として、王昭君への賛美や思慕、無能な臣下たちへの苦言、別れの悲しみ、そして雁

(10) 古名家本の丞相の退場詩はあまりに一般的で、劇の内容から乖離している。一方、元帝が先に退場して直接に毛延寿の処分に触れないことによって、悲哀の余韻が漂うという効果は認められるだろう。また、元曲選本は、題目を「沈黑江明妃青塚恨」正名を「破幽夢孤雁漢宮秋」とする。

の声にいや増す孤独感へと推移していく。この流れを可能にしているのが本劇の構成であり、それは他の主要な伝説にはなかった設定に依拠している。

もっとも重要なのは、王昭君と元帝がいったんは強い愛情で結ばれ、それによって毛延寿の悪事が露呈することである。

『西京雜記』の記述では、元帝が昭君の美しさに気づいたときにはすでに遅く、絵師たちを処罰するしかない。絵師たちは死刑に処せられて、それ以上は何もできず、匈奴とは何の関係もない。

「漢宮秋」では、元帝はふとしたことから昭君と会い、その口から毛延寿の収賄を知る。⁽¹⁾毛は死刑に処せられるはずが、逃亡して再び王昭君の運命を左右する力を發揮する。昭君と番国とのつながりは毛によって作り出され、その悪事の極端さに対応するかのように、昭君の死という極端な結末がもたらされるのである。この点に関しては、本劇の構成は十分な劇的緊張を呈していると言えよう。

つまり、毛延寿は悪意の塊のような人物であるものの、本劇の悲劇的な展開にとって不可欠であり、強力に劇を動かす役割を果たしているのである。

毛延寿がたくらみを実行する手段は、漢朝においても番国においても王昭君の肖像画であるが、これについては、疑問に思われる点もある。本稿第二節でも触れたように、王昭君の肖像画は実像とは異なる不美人の図であったはずである。ところが、それとは別に毛延寿が番国にもたらした美人図があり、さらに元帝が別離のちに掛けてながめる美人図がある。真実を写した複数の肖像画が、いつの間にか存在しているのは不可解であるが、演劇においては許される飛躍あるいは省略と言えようか。また、現実には中大夫が絵師でもあるということはあり得ないと思われ、劇中でも「画工」と明言されてはいないが、伝説を知る人々は毛延寿が絵師を兼ねていると見なすだろう。

肖像画を見る者は、それが実物をできるだけ忠実に再現したものと考え、ときには実物の代わりに見つめたり語りかけたりする対象となる。しかし、描かれた人物を知らない場合には、それが本当に実物に似ているかどうかはわからない。当然のことであるにもかかわらず、このことは見過ごされがちである。毛延寿はそれに乗じて、イメージを巧みに操ったのである。

六 無力な皇帝——抒情のドラマ

横暴な毛延寿がその力によって劇を展開させる一方、元帝はきわめて無力で無為の存在である。佞臣が暗躍しても気づかず、国難に見舞われても臣下たちは無能で何の対策も考えつかない。皇帝の短い幸福な日々も、臣下から見れば女色に耽っているに過ぎないのであり、次のせりふからは、確かにそうした一面が窺われる。

自從西宮閣下得見了王昭君、使朕如痴似醉、久不臨朝。今日方才升殿、等不的散了。只索再到西宮看一看去（第二折より）。

(11) 既述のとおり、元帝が昭君の奏でる琵琶の音色に誘われることで二人は出会う。このときにはまだ番国へ旅立つことになると思っても奇らない二人の出会いのきっかけが、琵琶という西域由来の楽器であるのは、その後の運命を暗示しているとも言える。琵琶を弾く王昭君というイメージの生成については、山本敏雄「王昭君説話と琵琶」(『愛知教育大学研究報告』53 (人文・社会科学編)、二〇〇四年)に詳しい。

(元帝せりふ) 西宮で王昭君に会ってからわたしは酔いしれたように夢中になってしまい、長らく朝廷に出ることもなかった。今日はやっと会議を開いたが、終わるのを待ちきれなかった。また西宮に会いに行くことにしよう。

また、毛延寿や王昭君は漢と番国とのあいだを移動するが、元帝は漢宮(及び瀟橋)に留まって動かない。元帝にできるのは、ただ自らの感情を歌唱することだけなのである。既述したように、昭君と別れたのちの元帝の心は、とりとめなく、現実と幻想のはざまにたゆたうようであり、曲詞はそれを余すところなく表現していると言えよう。

その曲詞において重層的なイメージを担っているのが、前節でも触れた「孤雁」である。雁は渡り鳥であり、本劇の舞台である北方と中原とのあいだを移動する。その長い距離は王昭君の旅路を彷彿させる。したがって孤雁は昭君をイメージさせ、元帝はその鳴き声に心をかき乱されている。

さらに、元帝は自らもまた一羽の孤雁であることを痛感している、つまり孤雁は昭君であると同時に元帝でもあるとは考えられないだろうか。吉川幸次郎は、第四折のもたらす「感動にあずかるもの」は、「主役元帝が、雁を自己とおなじく不幸な存在とし、雁に代ってその不幸をいたむことである。つまり自己の感情を雁に移入していることである」⁽¹²⁾と述べる。

元帝が無力で頼りなく孤独な存在であることは、まさに古名家本の「題目」の一句「漢元帝一身不自由」が表すとおりである。最も自由であると思われがちな皇帝であることによって、元帝の不自由はいっそう際立つのである。

おわりに——重層的な悲劇

元雜劇「漢宮秋」では、第三折の最後の単子のように、劇中人物があたかも王昭君伝説を知っているかのような不思議な表現が見られる。王昭君をめぐる伝説があまりに有名であったためかもしれないが、劇中で起こる出来事すべてが終わり、その顛末を知っている者の視点を、劇中人物までが共有してしまっているのである。⁽¹³⁾しかし、曲詞による抒情に力を注いだ本劇において、細部の整合性を求めるのは無粋なのかもしれない。

王昭君については、伝説が生まれただけでなく、六朝以来、数多くの詩が作られた。唐宋の詩人たちは、ときには自らの左遷などの境遇を王昭君と重ねつつ、故事に対する自らの感慨や解釈を示している。元雜劇「漢宮秋」にはそのような歴代の詩の蓄積が反映されているのではないだろうか。最後に唐詩の例をいくつか挙げて、本劇が歴代の詩の意境を継承している可能性を示しておきたい。⁽¹⁴⁾

まず、盧照鄰「王昭君」の後半を見てみよう。

(12) 前掲書(注4)、二〇九頁。

(13) 王昭君が自分の絵姿が歪められていることを知っているのも一例である。また、王昭君がまだ漢宮にいる第二折の【賀新郎】曲において、「青塚」(王昭君の墓の呼称)や「琵琶声断黑江秋」(琵琶の音は黒龍江の秋に消える)などと、その後の展開を先取りした語句が見られる。

(14) 阿部泰記編著『中国歴代「王昭君」故事(日本語版)』(阿部泰記、二〇二三年)を参照。

漢宮草心緑、胡庭沙正飛。

願逐三秋雁、年年一度帰。

「漢宮には緑の草がしげっているだろうが、胡庭では砂が舞い飛んでいる。できることなら秋の雁を追いかけて毎年一度帰りたい」。作者は王昭君の気持ちちを代弁して、雁とともに故国に帰りたいと言うのである。

次は白居易「昭君怨」である。

明妃風貌最娉婷、合在椒房応四星。

只得当年備宮掖、何曾專夜奉幃屏。

見疎従道迷図画、知屈那教配虜庭。

自是君恩薄如紙、不須一向恨丹青。

前半では、明妃（王昭君）は宮中でもっとも美しかったにもかかわらず皇帝に召されることもなかったことを述べる。後半は、皇帝と疎遠であったのが絵図のせいなのであれば、そのことがわかったのに匈奴に嫁がせることはなかったはずで、君恩などは紙のように薄いだから、絵師だけを恨むことはない、と元帝を批判するところが特徴的である。このような詩はほかにもある。

徐夔「明妃」がそれである。

不用牽心恨画工、帝家無策及辺戎。

香魂若得昇明月、夜夜還應照漢宮。

この詩の大意は、「いつまでも絵師を恨むことはない、君主が無策だから国境を侵されることになったのだ。昭君

の魂がもしも明月にまで昇ることができるなら、毎晩きつとまた漢宮を照らすことだろう」ということである。やはり皇帝に責任を帰し、それでも昭君の漢宮への思いは絶えることはないとする。「照漢宮」というのは、王昭君の輝くような美しさが「豊容靚飾、光明漢宮」(『後漢書』「南匈奴列伝」)と形容されていたのを踏まえた表現であろう。

このように、唐代にはすでに、漢朝の「無策」から起きた悲劇として解釈されていたことがわかる。元雜劇「漢宮秋」の朝廷における元帝と臣下たちのふるまいは、こうした過去の作品によって醸成されたものと考えられる。また、詩では免責されている毛延寿が、雜劇ではすべての責任を負って処刑されるという転換を見せているのは興味深い。

王昭君に対する詩人たちの思いは多様であるが、詩のなかには「漢宮」「雁」「琵琶」などの語が頻出する。宋代には王安石の「明妃曲」其二のように「漢恩自浅胡自深、人生樂在相知心」(漢の恩は浅く胡の恩は深い、生きていて楽しいのはわかってくれる人の心)と、匈奴の生活を肯定的にとらえる詩も登場する。⁽¹⁵⁾

もちろんこうした詩は、王昭君が匈奴で单于の妃となったことを前提としているのであるが、元雜劇「漢宮秋」の曲詞には、歴代の王昭君にまつわる詩とそこで用いられた詩語が重層的に反響し、この悲劇を一篇の「抒情詩劇」としているのではないだろうか。

(15) 「明妃曲」二首は内容的には元雜劇「漢宮秋」とはかけ離れるが、やはり「漢宮」「丹青」「鴻雁」「琵琶」「飛鴻」そして「毛延寿」といった語が用いられている。

(16) 劉小梅前掲書(注5)、一六一頁。

Lonely Powerless Emperor: An Essay on the Yuan Drama *Hangong qiu* 漢宮秋

HIROSE Reiko

Hangong qiu (*Autumn in the Han Palace*) 漢宮秋 is one of the most famous pieces of Yuan drama, placed at the opening of *Yuanqu xuan* (*Selection of Yuan Plays*) 元曲選 compiled in the Ming dynasty. It is based on the legend of Wang Zhaojun 王昭君, a court lady of the Han dynasty who was forced to marry the khan of Xiongnu 匈奴.

According to the formal historical records, Wang Zhaojun did marry the khan and had children with him, although nobody knows whether she was happy. However, among the people, the marriage with the barbarian king of the northern land was often regarded as a great tragedy and brought about a variety of literature, including poetry, prose, and storytelling. *Hangong qiu*, in the form of drama, made the story more tragic.

The author makes a comparative interpretation of this story and points out the originality of *Hangong qiu*. Compared with the legends before this drama, Mao Yanshou 毛延壽 in this play is portrayed as a much worse machiavellian who manipulates the mind of a mediocre and weak-minded emperor, Yuandi 元帝 and made his attention away from political matters. Eventually, Mao puts a period on a happy short love affair with Yuandi and Wang Zhaojun and finally drives Zhaojun to commit suicide at the border of Han and the barbarian land.

The protagonist of this drama is the emperor Yuandi. As the leading role, he sings all the arias, fully expressing his sentiment, but he cannot take any action.

The most touching lyrics are in the Act 4, the scene after the departure of Wang Zhaojun to the northern land. In this scene, Yuandi is alone in the palace at night and suddenly hears a goose honk. A migrating goose who travels a long way, exhausted and lonely, effectively reflects the image of Wang Zhaojun. It makes Yuandi feel he is also similar to the honking goose. The utmost status of the emperor even more highlights his loneliness and powerlessness. Then, the drama comes to an end with a sad resonance. The author concludes that *Hangong qiu* enhanced the tragic theme by positioning the emperor as the sentimental protagonist, contrasting with the villain Mao.